

阿蘇の草原は誰によって維持されているのか……

熊本大学 徳野貞雄

1. 報告趣旨

1) 阿蘇の草原の概況

阿蘇の大草原は、原始自然ではない。赤牛の放牧や採草地として農民の営農活動の中で維持されてきた農業環境である。草原は、農民にとっては経済価値を生み出す生産現場としての牧野である。この「価値」ある牧野を維持管理するために、農民たちは大小の「牧野組合」(共同体)を作り、牧野を共同利用すると伴に、過酷な「輪地切り」や危険な「野焼き」の共同作業を「道徳」として長年行ってきた。

しかし、現代の大規模かつ急激な社会経済変動は、阿蘇の農業状況を急激に変化させていく。

牛肉の自由化による畜産農家の急激な減少、農業者の高齢化と後継者不足などである。その結果、かって阿蘇郡2万haと言わされた野焼き面積は、平成6年には約1万1千haにまで減少している。『草原の危機』が叫ばれ、農業振興・畜産振興等が講じられているが、はかばかしい効果はない。

だがしかし、阿蘇の草原は現在でも約1万5千頭の赤牛が飼養（放牧は約1万頭）されるだけでなく、年間14,000万人と言われる阿蘇観光の中心的資源の一つでもある。さらに、近年の自然環境の保全問題や「農の多面的機能」の再評価などの活動が活発になり、「阿蘇の草原を守ろう」という声も大きくなり、様々なキャンペーンやイベントが行われ、1995年に『財団法人 阿蘇グリーンストック』が、地元農家、都市住民、学者、行政、企業、諸団体などによって設立され、専従職員を軸に多彩な活動が行われている。

すなわち、阿蘇の草原を守る担い手は減少しているが、外部からの草原の評価は高まっている。「草原を守れ」という声は人々によって共有されているが、その具体的な担い手や方法は見えていない。以上が大まかな阿蘇の草原・牧野の状況である。

2) 報告のねらい

現代という大きな社会変動の中で、1) 阿蘇の草原・牧野という価値が、どのように変化しているのか。2) その変化している【価値】(草原・牧野)を、誰がどのようにして(野焼きやグリーンストック運動など)の行為を通じて維持しているのか。また、維持できるのか。即ち、草原を維持するための【道徳】がどのように形成されているのか。3) その行為主体である地域の人々の生活構造及び阿蘇地域の地域社会構造の特質と変化から、上記の1)と2)の課題を検討する。即ち、草原という環境を維持するための社会過程の研究である。

3) 具体的な検討項目

- a、阿蘇の住民の生活構造と阿蘇の地域構造の変化とその特質
- b、農業者が減少する中で、誰がどのような動機付けをもって野焼き・輪地切りを行っているのかの「担い手」の実態調査（従来の野焼き研究ではほとんど検討されていない）
- c、非農業者や若者がどのようなプロセスで野焼きに参加してくるのか。
- 【価値】の内面化から【道徳】形成へ
- d、当事者と周辺の指導者の行動と意識のズレ (c f 都市住民の参加の意義)
- e、今後の野焼きの動向と政策の妥当性（予言の自己成就化の問題）